

20. 徐 錫元・小寺 敦・嶋津正幸・廣田宜久
2000. 北海道における水田畦畔の雑草防除の
現状. 雑草研究45(別): 108~109.
21. 徐 錫元 2001. 日本の水田畦畔管理につい
て. (1) 畦畔の形と役割. 植調35(7): 238~246.
22. 徐 錫元. 未発表.
23. 鈴木芳人 2001. イネにおける害虫防除のボ
イント. 今月の農業45(1) 24~27.
24. 高橋 聡, 近藤義典, 徐 錫元 1997. 東
北地方における水田畦畔雑草防除の特徴. 植
調. 31(9): 346~353.
25. 土田邦夫1997. 農業環境の雑草管理におけ
る生育調節剤利用の可能性. 日本雑草学会
第12回シンポジウム講演要旨pp. 45~48.
26. 植木一久 1995. 新潟県における水田畔畔
・農道におけるクサカットゾルについて. 農
業時代170: 12~15.

雑草コボレ話

●セイトカアワダチソウ多摩川を渡る

秋も深まる10月後半~11月にかけて、枯れたススキやオギの穂が目立つ頃、温暖地の河川敷、あき地、用水路の土手、道端などに群落をつくったセイトカアワダチソウが、大きな花穂をつけ黄色の花をいっせいに咲かせ見事な景観をつくる。この風景は最近では晩秋の風物詩の一つとなっている。

セイトカアワダチソウは北アメリカ原産の帰化植物で、戦後（昭和20年代）に温暖地を中心に帰化し、半世紀を経た今日では全国各地に広まっている。この草が急速に全国に広まった一つの原因に、養蜂業者が広めたという説がある。大群落をつくり、大きな花穂に多数の花をつけ、しかも他の植物の花がなくなる晩秋に花を咲かせることから、晩秋の蜜蜂のかっこうの蜜源になることに目をつけた養蜂業者がセイトカアワダチソウを意識的に広めたという説である。

セイトカアワダチソウは公害雑草として嫌われた時代もあった。この草が各地に広まりだした昭和30年代には花粉症の原因雑草として問題視された。大群落をつくり、いっせいに多数の花が咲き風になびくことから花粉公害の元凶として防除にやっきとなったが、その後、セイトカアワダチソウは虫媒花で、花粉は風に乗って飛ばないということが理解されるようになって、公害雑草の汚名は晴らされた。

この全国的に広まったセイトカアワダチソウであるが、つい最近まで関東地方の一部に帰化していない地域があった。それが東京都の西部、多摩川を越えた日野市、八王子市の浅川流域の一帯である。平成6年頃この地域ではまれに草花として庭に植えられていたが、あき地や河川敷、道端ではほとんど見られなかった。それが平成13年現在、あき地、道端に群落をつくり、晩秋の野に黄色の色どりを添え、晩秋の風物詩となっている。多摩西部もどうやらそ並みになったようである。

⑤

